

## 研究プロジェクト

## 近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究

秋丸知貴（日本美術新聞社編集局長）

## ■図像解釈学とは何か？

一般に、生物は、それぞれ種に固有の感受器官と反応器官が構成する、固定的な「環境世界」（ヤーコプ・フォン・ユクスキュル）に閉じ込められている。これに対し、本能が壊れた「欠陥生物」（アーノルト・ゲーレン）である人間は、環境「世界内存在」（マルティン・ハイデッガー）であると共に、環境「世界開放性」（マックス・シェーラー）も有している。

エルンスト・カッシーラーは、この世界開放性の鍵を「象徴形式」と見る。つまり、人間は、感受系と反応系の中に象徴系を介在させ、「対象の身替」ではなく「対象の概念のための乗物」（スザンヌ・ランガー）として、抽象的・精神的内容を具体的・感性的形式で表現する、象徴形式を能動的に形成することにより、自然から自由になると同時に自然を制御する。

そして、この象徴形式の中でも、言語的「アイデア」に先行する、図像的「アイコン」（ハーバート・リード）としての造形芸術、特に絵画こそは、最初に外界と内面を調節し、感情と思考を調整し、認識と行為を調律し、環境への適応を可能にする、人間文化の最も基礎的で根源的な象徴形式である。

これを受けて、同一の文化圏におけるさまざまな文化事象との照合を通じて、可視的な具現的・感性的記号の造形と画題に、それを創出した時代・社会に通底する不可視的な心性的・精神的意味内容を解釈する美学・美術史学方法論が、エルヴィン・パノフスキーが開拓した「図像解釈学（イコノロジー）」である。

## ■近代技術的環境における心性の変容——アウラの凋落

本研究プロジェクトは、この図像解

釈学を近代西洋美術に適用し、その本質的特性である抽象化傾向に、近代技術的環境における心性の変容の反映を考察する。

まず、ヴァルター・ベンヤミンの「アウラ」は、原著に即して分析すれば、同一の時間・空間上に共存する主体と客体の相互作用により相互に生じる変化、及び相互に宿るその時間的全蓄積と読解できる。また、そうしたアウラを典型的に生み出す、主体が客体と同一の時空間上で原物的・直接的・集中的・五感的に相互作用する関係を「アウラの関係」、その場合の主体の客体に対する知覚を「アウラの知覚」と定義できる。

基本的に、生来的身体と天然的自然に基づく「自然的環境」（ジョルジュ・フリードマン）では、技術は肉体の連続的延長であり、動力は天然自然力に依存しているため、人間は環境に物理的に内包され織り込まれていた。したがって一般的に、自然的環境では、人間と外界の関係は密接的で沈潜在的なアウラの関係であり、その知覚は持続的で充実的なアウラの知覚であった。

そして、このアウラの知覚を必須的前提として発達したのが、前近代西洋美術の主流的特徴である、自然主義的なルネサンス的リアリズムである。なぜならば、その特質である緻密で具象的な再現描写には、対象との濃密で没入的な「感情移入」（ヴィルヘルム・ヴォリンガー）的相互関与が経験上不可欠だからである。

これに対し、日常生活のさまざまな場面で、主体と客体の間に「有機的自然の限界からの解放」（ヴェルナー・ゾンバルト）を招く各種の「近代技術」が介入すると、そうした主客の自然な心身の相互交流は現実的に阻害され、主体の「感覚比率」（マーシャル・マク

ルーハン）は捨象的に変更され始める。その結果、「近代技術的環境」では、主体にはアウラの関係が十全に成立していない「脱アウラの関係」による「脱アウラの知覚」が発生することになる。

そして、そうしたアウラの知覚の衰退につれて、徐々に絵画においては、従来の主流であったルネサンス的リアリズムは妥当性を喪失し、新たに動態的・間接的・二次元的・抽象的な近代技術的環境に象徴的に適応する抽象造形が勃興することになる。すなわち、「アウラの凋落」（ヴァルター・ベンヤミン）と近代西洋美術における抽象化傾向は、同時代的な並行現象である。

## ■抽象絵画と近代技術——こころの未来研究の一事例として

上記の過程は、「ヴァルター・ベンヤミンの『アウラ』概念・『アウラの凋落』概念について」「近代絵画と近代技術」「印象派と大都市群集」「セザンヌと蒸気鉄道」「フォーヴィスムと自動車」「近代絵画と飛行機」「『象徴形式』としてのキュビズム」「近代絵画と近代照明」「近代絵画と写真」「抽象絵画と近代技術」等として主題化できる。

本研究プロジェクトは、2010年から2012年にかけて、これらの個別主題に関して、口頭発表を14件（学会12件、研究会2件）行い、論文発表を学会誌等で14件（査読有り10件、査読無し4件）行った。なお、その内の1件（秋丸知貴「近代絵画と近代技術——近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究」『形の科学会誌』第25巻第2号、2010年）により、2011年度形の科学会奨励賞を受賞した。そして、本研究プロジェクトの一部『ポール・セザンヌと蒸気鉄道』により、京都造形芸術大学大学院より2011年度博士学位（学術）を授与された。